

聖書：Iサムエル2：1～10

説教題：ハンナの祈り

日時：2015年7月26日

1章ではサムエルの誕生の様子が記されました。その母ハンナは不妊の女で、夫エルカナのもう一人の妻ペニンナからいじめられる日々を過ごしましたが、主の宮での心を注ぎ出す祈りを通して、主からの平安を得、ついに男の子を授かります。彼女はその子を誓願通り、祭司エリのもとに連れて行って主にささげるところまでを前回見ました。今日の2章前半はその時に歌った歌なのでしょう。

このハンナの祈りを見て分かることは、単なる個人的な歌ではないということです。ただ「わが子を授かって感謝！」というプライベートな喜びを歌った歌ではありません。確かに個人的な感謝から始まっていますが、彼女は今回のことを神がこれから全世界に対して行なわれるみわざとの関連で見えています。反対から言えば、このことを導かれた神が確実にもたらすであろう将来の偉大な祝福について歌っています。そういう意味でこのハンナの祈りは今日の私たちにも関係するものであり、またこれから先の歴史についても当てはまるものと言えます。

まずハンナは1節でこう歌い出します。「私の心は主を誇り、私の角は主によって高く上がります。私の口は敵に向かって大きく開きます。私はあなたの救いを喜ぶからです。」新改訳の行頭を見ると、「私」「私」「私」「私」と並んでいますように、彼女はまず個人的経験から始めています。1行目の「誇る」という言葉は「喜ぶ」という意味の言葉です。彼女は主を喜んでいます。2行目の「角」は動物のイメージの言葉で、角は力のシンボルです。まるで動物が勝利を喜んで角を高く上げるように、ハンナは主を喜んでいます。3行目の「口を大きく開く」とはどういう意味でしょう。動物が口を大きく開く時は相手を威嚇する時ではないかと思いますが、ここでは4行目と一緒に考えられるべきなのでしょう。すなわち口を大きく開けて主の救いを喜ぶということです。そして2節は勝利を下さった主なる神への信仰告白です。「主のように聖なる方はありません。あなたに並ぶ者はないからです。私たちの神のような岩はありません。」聖書における「聖」は「区別する」という意味です。つまり神は他とは区別されるお方、私たちとは全く次元の異なる偉大な方。それゆえ、あなたに並ぶ者はない。また「私たちの神のような岩はない」とは、あなたのような私たちがより頼むために満ちた力強い岩はないということでしょう。

3節は自分を誇る者への警告です。3節前半：「高ぶって、多くを語ってはなりません。横柄なことばを口から出してはなりません。」ここで考えられているのはまずペニンナでしょう。彼女はハンナよりも先に子をもうけたことで高ぶり、横柄なことばを

口から出しました。しかしハンナはペニンナに対してだけ語っているのではありません。原文では「あなたがたは」という複数形の言葉がここには使われていますから、ハンナは高ぶるすべての人に対して語っています。なぜ高ぶってはならないのでしょうか。3節後半に「まことに主は、すべてを知る神」とあります。ここに私たちが思い巡らすべき大事な神の姿が告白されています。

ペニンナは高ぶってハンナをいじめましたが、主は「すべてを知る神」でした。たとえ夫エルカナの目の届かない密室でいじめたとしても、主はすべてを見ておられました。外側の行動ばかりか、その心の中にあることも、思い計ることもすべて。それはハンナについても当てはまります。彼女が苦しんでいたこと、悲しんでいたこと、そのために食事もままならず、泣きながら主に祈らざるを得なかったことも……。私たちの生活でも理不尽なことが起こります。その時、私たちは思います。神はこれを見ておられるのか、知っておられるのか。であるならなぜ、このことを許されるのか、神は気がついていないのではないか、見逃しておられるのではないか。この結果、私はこのまま闇の中に葬られて行くだけではないのか。しかしハンナがここで告白していることは、「主はすべてを知る神」ということです。だからこそ、時を定めて必ずふさわしいさばきを行なわれる。それが3節最後の行の意味です。口語訳：「主はすべてを知る神であって、もろもろの行ないは主によって量られる。」新共同訳：「主は何事も知っておられる神。人の行ないが正されずに済むだろうか。」主はすべてを知る神として、それぞれの行ないを量りにかけて、必ずふさわしいさばきと報いを返すのです。

その神によって、今の秩序がいかにひっくり返されるかが4～8節で述べられます。まず4節では「勇士の弓が砕かれ、弱い者が力を帯び」とあります。5節では、これまで十分に食べ飽いた者が、パンのために働かなくてはならなくなり、これまで飢えていた者が飢えることのない状態になるとあります。次の「7人の子」は理想の子どもの人数という意味ですが、不妊の女は理想の子宝に恵まれ、逆に多くの子を持つ女はしおれてしまう。このように今の秩序が全くひっくり返され、どんでん返しが起こる。それは「主」によってだというのが6節以降です。「主は殺し、また生かし、よみに下し、また上げる。主は、貧しくし、また富ませ、低くし、また高くするのです。主は、弱い者をちりから起こし、貧しい人を、あくたから引き上げ、高貴な者とともに、すわらせ、彼らに栄光の位に継がせます。」もちろん、これは高い状態にある人がやがて自動的に低い状態に突き落とされるということではありません。主はすべてを知る神であり、その人が神の前でどのように生きたかに応じて報われるのです。ですから9節に「悪者どもは、やみの中に滅びうせます。」とあります。また10節に「主は、はむかう者を打ち砕き」とあります。あくまでそのような姿を示した者に対して逆転劇

が起こるのです。しかしそれとこれとは深い関連もあるというのは真実でしょう。今、祝福にある者は往々にして高ぶりやすい。先に子に恵まれたペニンナは、優越感を持ってハンナを見下しました。人は満足する高い位置にいと、知らず知らずの内に高慢になりやすいのです。そして神ではなくおのれの力に頼り、何でもおのれの力でできるかのように考え、勝手な生活をしがちです。ですから私たちは気をつけなければなりません。「すべてを知る」神の前で、今の私の生き方は大丈夫か。やがての日すべてを剥奪されて、考えてもみなかった低きに落とされることはないか。

また反対に今、悲しみのただ中にあり、低い状態にある人が、自動的に高き上げられるのではありません。9 節に「主は聖徒たちの足を守られます。」とあります。この 9 節の「聖徒」という言葉は「神のあわれみ・慈しみに頼って生きる人」という意味の言葉です。新共同訳ではここを「主の慈しみに生きる者」と訳しています。私たちに求められていることは、この神の慈しみに感謝し、この慈しみだけを頼りとして生きることです。そのように神に信頼して生きる人は、神に喜ばれるようにと歩むでしょう。そのような人が高く上げられるのです。ですから今、低きにあっても、ただつぶやき、口から横柄な言葉を出すなら、何の良い将来も期待できません。しかしやはりこちらにおいてもそれとこれとはつながりがあるのです。1 章で見ましたように、ハンナは低きに置かれていました。悲しみの毎日で、何もそこに良いものが見られないようでした。しかしそういうハンナが、主への熱心な嘆願へと導かれ、そこから主のみわがが始まって行きました。すなわちハンナが経験した低い状態は、神の偉大な祝福につながる前奏曲のようなものだったのです。それは後の祝福のために是非とも必要な導きであったとさえ言えるのです。ですから私たちもし、自分が今、低い状態にあるなら、そのことを軽蔑してはならない。むしろそれは私たちが自分の「無」を告白して、主の慈しみにいよいよすがって生きるためのチャンスなのです。低い者こそ実は主の祝福に一番近くあるのです。この特権に生きなくてはなりません！

ハンナは 10 節で、さらに最後のさばきの日までを見つめています。10 節後半に「主は地の果て果てまでさばき」とあります。神のさばきが世界の隅々まで完全に行なわれる日が来ます。そして「ご自分の王に力を授け、主に油注がれた者の角を高く上げられる」という救いの日が来ます。ここでしばしば議論になるのは、イスラエルにはまだ王が誕生していないのに、どうしてハンナはこのように歌えたのかというものです。そこでこれはもっと後代の人の加筆によるのではないのかなどと言われたりします。しかしサムエル記の前の士師記にも王の誕生を待ち望む民衆の一般的な期待がありましたし、さらに遡れば申命記の時代のモーセの言葉の中にも、さらにはアブラハムに対する主の言葉の中にも、将来与えられる王についての言及があります。このような中で、ハンナが将来イスラエルに王が誕生し、その国が栄える日を預言的に見て

いたとしてもおかしくありません。これは直接的には今後見て行くダビデ王朝を指すものとなります。そしてさらに遠くは、まことの王キリストによる御国の祝福を指し示すものです。ハンナはそのまことの王メシヤが統治する、正義の国の到来を望み見て喜び、主に感謝の賛美をささげたのです。

ハンナはこのように今回の出来事を単なる個人的な出来事とせず、神がこれからなされるみわざの前触れと見て歌いましたが、これとそっくりな歌を歌った人がいるのを皆さんはご存知でしょう。それは主イエスの母マリヤです。ルカ1章46～55節：「マリヤは言った。『わがたましいは主をあがめ、わが霊は、わが救い主なる神を喜びたたえます。主はこの卑しいはしために目を留めてくださったからです。ほんとうに、これから後、どの時代の人々も、私をしあわせ者と思うでしょう。力ある方が、私に大きなことをしてくださいました。その御名は聖く、そのあわれみは、主を恐れかしこむ者に、代々にわたって及びます。主は、御腕をもって力強いわざをなし、心の思いの高ぶっている者を追い散らし、権力ある者を王位から引き降ろされます。低い者を高く引き上げ、飢えた者を良いもので満ち足らせ、富む者を何も持たせないで追い返されました。主はそのあわれみをいつまでも忘れないで、そのしもベイスラエルをお助けになりました。私たちの父祖たち、アブラハムとその子孫に語られたとおりです。』」マリヤはハンナの祈りを下敷きにしたのでしょうか。ある人はマリヤは常日頃から会堂で旧約聖書が朗読されるのを聞いていたから、ハンナの祈りに重ね合わせて自分の歌を歌ったのだろーと言います。またある人は、マリヤはハンナの歌に倣ったわけではなかったが、自分になされた主のみわざを思い巡らして賛美した結果、はからずも聖霊によって同じ真理を告白することになったのだと言います。どちらにしても素晴らしいことです。マリヤもここで、やがて行なわれる逆転劇について歌っています。心の思いの高ぶっている者は低められ、主を恐れかしこむ者が高く引き上げられる。そしてこのマリヤの賛歌においても「心の高ぶっている者」は「今、高くある者」とほとんど同義語として語られており、また「主を恐れかしこむ者」は「今、低められている者」と同一の人々として語られています。ですから私たちは点検しなければなりません。自分は今現在の祝福に満足して、いつしか高ぶり、やがて主によってそこから引き降ろされる生活を送っていないだろうか。また反対に、もし今低きにあるなら、私たちはそれを軽蔑すべきではない。それは一層主のあわれみによりすがり、主を恐れかしこみ、主の慈しみに生きるための特別な招きにあずかっている、ということです。そのような人のために神はキリストを与え、キリストにあつて大いなる祝福に入れて下さるのです。

ハンナはすべてを知る神がやがて混乱状態を解決すべく、王を立て、その国を祝福して下さると言いましたが、この王とはダビデを指し、さらにまことの王キリストを

指します。そしてまことの王キリストは、すでに私たちのところに送られ、メシヤによる神の国の支配はすでに実現し始めています。エペソ書 2 章 6 節によれば、神は私たちを「キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。」とまで言われています。ですから霊的な現実において、すでに私たち低き者は高き所に引き上げられて、まことの王の勝利と栄光を分かち合っている者にされている。そしてその霊的な現実が目に見える形ではっきり現わされる究極の日が、いよいよこれから来たらんとしているのです。

なおその日までの間、私たちは地上にあって悩みがあり、戦いがあり、困難があります。しかし覚えるべきは、私たちの目に見える今の状態が最終状態ではないということ。今の秩序は、やがてひっくり返されるのです。かの日には、皆があつと驚くどんでん返しが必ず起こる。そのことはハンナの祈りに、またマリヤの賛歌にはっきり歌われています。私たちはそこから学んで自分の歩みを整えたいのです。主はすべてを知っておられます。そして人々があつと驚くどんでん返しの判決をされます。ハンナと共にこのような主を恐れかしこみ、主を賛美し、神が下さったまことの王によっていよいよ高く上げられる日を楽しみに待ち望む聖徒たち、主の慈しみに生きる者たちの歩みへ進みたいと思います。